

【「滋賀大学名誉博士」称号授与記念】 商売道の精神と倫理

丹羽宇一郎

Uichiro Niwa

在中華人民共和国 日本国大使館 / 特命全權大使
滋賀大学 / 名誉博士
(前伊藤忠商事株式会社 / 相談役)

〔講演日時〕

2010.03.08〔月〕／16:00-17:00

経済学部講堂

2010.3.8〔月〕、経済学部講堂において、
大学はじめてとなる「滋賀大学名誉博士」の称号を
授与された丹羽氏の記念講演の内容を
収録しました。

ただいまご紹介ありました丹羽でございます。称号授与式でも申し上げましたように、伊藤忠の創業者の伊藤忠兵衛は1842年に滋賀県で生まれまして、1903年に亡くなりましたが、その忠兵衛の名代として、このような場にお招きいただき、名誉博士号を授与いただいたことは、私だけでなく当社としても大変名誉なことと思っております。

さて、近江商人がなぜ、このように日本の経済の中でも大変に有名になったのかということですが、私は近江商人が、近江に本宅を構えたままで、広域の商いを開始したからだと思います。そして、それは社会的な基盤として、人の輪を軸とする基盤を持っていたからです。つまり、てんびん棒を担いで全国に出掛けることが可能になったのは、そういう社会的な基盤があったからだと思います。

もちろん、近江商人が活躍した江戸時代は鎖国の時代であります。江戸時代の中期から、地の利も伴って、多くの商人が生み出され、大きく発展することができたと思われます。城下町を中心に、商売の範囲がだんだん広がっていったわけですが、近代資本主義と言われるようなものになるには、会計、「店法」などにより経営が近代化される必要があります。こういうインフラが整っていないと、やはり「近代」という言葉も付けにくいということがあります。

その近代資本主義が日本で始まったのは、明治に入ってからだろうと思います。その時期に近江商人の系統で最大の規模になったのは、伊藤忠という会社でございます。そういう意味でも、この忠兵衛の功績は非常に大きいわけです。

初代忠兵衛の家是・理念が、いまも生きて継承されているということですが、これは近江の商人に共通に共有されてきた一つの精神でもありました。それは、近江商人のひとりである中井家の家訓にも、そういうことが見られることから明らかです。

そして、それは、ある意味では、近代資本主義の精神であると私は考えています。理論的に言えば、近代商売道の精神と言うこともできるのではないかと思います。少し大げさかもしれませんが、この精神なくして日本の資本主義の発展とか、日本経済の発展はなかったのではないかとすら思うのです。

忠兵衛は1870年代に「店法」として経営理念を表しましたが、まさにマックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を公表したのが1905年ですからその約30年前に当たるわけであります。マックス・ウェーバーの言う資本主義の精神、あるいはプロテスタンティズムの倫理ではございませんが、倫理というものがすでに30年前の日本の明治の初期に近江商人を中心に存在していたということが確言できるのではないかと考えています。

さて、この近江の商売道の精神と倫理に関して、私が皆さん方と考えを共有したいと思うのは、昨今の日本だけではなくて、世界の経済や資本主義の状態を見たときに、この精神や倫理の欠落というものを嘆かざるを得ない状況に來ているからです。

もとより人間というものは、200万年以上にわたり動物の血が流れていまして、神々の論理、理性というのは、わずか5千年に過ぎないということですから、決して、人間がいつも合理的に動く動物ではないということは、皆さん方もまず物事を判断するときに十分把握しておく必要があるだろうと思います。

しかし、これは、新古典派経済学の合理的期待形成論を私が批判しているということではありません。経済学という学問は、古典派経済学についても、アルフレッド・マーシャル以来の新古典派経済学についても、仮説を立てなければいけません。そこでは人間は合理的に行動するものだという前提がないと理論が成り立たないのです。

人間は、はちゃめちやに動いているものだということであれば、従来の経済学は成り立たないわけですが、少なくとも、人間がいつも合理的に期待されたように動くものではないということも当然です。

2002年にダニエル・カーネマンというプリンストン大学の教授が、神経経済学と行動経済学分野での貢献ということでノーベル経済学賞を受けましたが、これは人間が、非合理的な動きをするものだということを言っているわけではなく、時として経済人としての合理性から離れることがあるという前提で新しい経済学を展開しています。しかし、人間がいつも合理的に動くわけでないからと言って、所詮経済学は当たらないとか、経済学は信用できないと言っているわけではないということも理解していただく必要があります。

さて、利益のうち私益、つまり、自分の利益の追求という利己と、他益の追求という利他の共存が人間でありまして、この点については、アダム・スミスも、先ほどのアルフレッド・マーシャルの新古典派から100年以上前になりますが、そういう非合理的な人間行動というものを指摘していたわけです。

そういう意味で、人間とは、いったい、いかなるものなのかということは、経済学においては重要なテーマですが、企業の経営者にとっても大変重要なテーマになります。

では、人間とはどういうものなのか。一言で答えられるわけではないと思いますが、1912年にノーベル生理学・医学賞をもらった、アレクシス・カレルという学者が、1935年に『人間 この未知なるもの』という本を出版しています。日本でも文庫本も出ておりますが、世界17カ国で翻訳されております。その本で、彼は人間は世の中のすべてを自分と結び付けて考える、要するに、自己中心的に考える動物だと書いています。又、知能・道徳も訓練を怠る

と退化するものである、とも書いています。私もよく言っておりますが、肉体には一日に3回栄養を与えているけれども、心に栄養を一日何回与えているだろうか、訓練しないと心も退化する、こういうことを言っているわけです。人間は学ぶものです。年を取ってきたから退化するというのは間違いだ。退化は老化が原因ではない、若者だって退化する、こういうことも言っております。

いずれにしても人間というものは、寒ければ暖房がほしい、暑ければ冷房がほしい、というように本能というものに従う大変に難しい動物なのです。やはり理性よりも動物の本能の方が先に出てくるということを、まずわれわれはあらゆることを考える点において、心すべきということです。

まず利己で自分の利益、次に利他で公共への利益です。しかしながら、自分の利益をいかにコントロールして抑えていくか、これがまさに慈悲であります。これがキリスト教、あるいは儒教にもつながってくるわけであります。従って、まず人間というのは、どんな動物なのかということを前提にして、われわれは考えていく必要があるということです。

商売についても、金は卑しいものという考え方がありますし、「士農工商」という言葉もありました。商いは卑しいものと思い込んだ時代も、やはり、いまから数百年前には当然のこととしてあったわけです。

これは、その一つの例ですが、新宿に中村屋があります。この会社は明治37年、1904年ですから、ちょうどマックス・ウェーバーの本が出たころであります。クリームパンを日本で初めて商品化した会社です。そして、純印度式カレーとボルシチで、大変日本で有名になりましたが、その中村屋の創業者の相馬愛蔵さんという方の『私の小売商道』という本があります。それによりますと、「わが国では、昔から、うまくごまかしてもうけることが商売で

あるくらいに思っていた」とあります。これは明治37年の頃の話です。「商売には人格とか道徳とか、まったく無用なものと考えている人が少なくなかった。その結果は、他人も商人は卑しい者だと思い、商人もまた自らを卑しい者だと思うようになってしまった。立派な商品、正しい商売をやって行けば、決して卑しい者ではない」と彼は言っているわけがあります。

このように商売をすることが卑しいものなのだという考え方がありましたが、それは数百年前の時代から言われてきています。中村屋さんの指摘だけではないのです。

もちろん、商売、あるいはビジネスとしての商取引というものは、中国でも、あるいは大阪でも「もうかりまっか」というのがあいさつになるぐらい、当然、お金をもうけるということが前提です。会計や簿記が導入されてからの話とか、そういう時代の話ではなく、ずっと前から、中国でも、あるいはイスラエルでも、あるいはヨーロッパの諸国でも、言わば洋の東西を問わず、いろいろあったわけです。

しかし、この営利の精神が盛んだからと言って、近代の資本主義が自然発生的に生まれるということではないということです。もうけるだけでよければ、ずっと前から資本主義は近代資本主義になっていたかもしれません。しかし、近代資本主義は、私が最初に申し上げたように、近江の商売道というものの根底に流れている精神によって生まれてきたのだと思います。

私がなぜそう言うかといえば、やはり、ただ単にもうければいいということではなくて、そこにある倫理、あるいは徳目というものに注目していく必要があると思うからです。

そして、なぜ中国ではなくて近江なのか、しかも、なぜこの商売道の倫理、精神というものにより近代資本主義というものが発展してきたのか、という

ふうに考えてみる必要があります。地の利だけではないでしょう。なぜ近江なのか。なぜ大阪ではなく、なぜ中国ではなかったのか。中国では大変な勢いで商取引が行われていたわけであります。その理由を私はマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中に見いたしたような気がいたします。

実際には、近江の商売は、この本では触れられていません。その時代の日本の資本主義、あるいは日本の経済においての情報はほとんどなかった、少なくとも不足していたからでしょう。この本が書かれたのは1905年ですから、伊藤忠兵衛が亡くなった2年後です。そのころの日本の情報はほとんどなかったということは非常に残念なことであります。もし日本の近江商人の商売道というものを彼が目にしていれば、このマックス・ウェーバーの本が今のものとは変わったものになっていたのではないかと思うわけです。

マックス・ウェーバーは、比較宗教社会学的研究ということで、この本を出版したわけです。要するに、彼が出版した背景は、プロテスタンティズムの倫理の研究ということだけでなく、比較宗教社会学の研究がありました。

商取引というものの、あるいは「市」ないしマーケットというものは、日本では大化の改新が645年で、次に中央主権体制の「大宝律令」に代表される律令国家の時代がありましたが、それ以前から生まれているわけです。そして、日本でも欧米でも、マーケットが拡大してきています。これが資本主義の原点です。

しかしなぜ、それを近代資本主義と言わなかったかということです。そういう意味では、まだ近代資本主義は生まれていなかったのです。それは単なる商取引であり、単なる金もうけであり、金欲のためのものにすぎませんでした。近代的な、本質的

な商売に対する倫理の規制はなく、極めて自由な取引が行われていました。自由裁量的に、どんどんお金をもうける。あるいは、動物の本能的な競争というものがマーケットを突き動かしてきたわけですが、これは近代資本主義とは言えない、と彼は言っているわけです。なぜ、そんな中で欧米で近代の倫理が、近代資本主義の精神が勝ち残ってきたか、ということを比較宗教社会学的に彼は分析しているわけです。

もともとの端緒は何か。欧米において、そのようなことが起きた原点は、何と1517年のマルティン・ルターの宗教改革にあるわけです。1517年というと、日本で種子島に漂着したポルトガル船から鉄砲が伝来した年が1543年、上杉・武田の川中島の戦いが1553年から1564年と言われていますから、何とまだ500年弱前ですが、そのころの話です。

マルティン・ルターは、教会が財政のために、罪の償いが免除されるとして免罪符を発売したことを批判しました。教会が金もうけのために、罪を許すと言って大量に免罪符を出した。これに対する批判として、宗教改革が起きたわけです。

ここから、いままでの権威を否定して、カトリックから分離したプロテスタントという動きが始まりました。そこでは、いままでにない厳しい戒律を要求したわけです。その一つがカルヴァンのカルビニズムという改革派につながっていったわけです。

これは、いままでの伝統的な宗教と違って、さらに厳しい戒律を追求するもので、一つの内的禁欲と言いますか、教会内の禁欲を教会外の禁欲にまで広げていったわけです。その流れとして、英国、あるいはアイルランド、オランダというようなところに、次々とピューリタニズムが広がっていったわけです。

従いまして、イギリスにおいては、市民革命は、非ピューリタニズムの伝統的な政権から権力を奪

取するというかたちで始まったわけですが、この発端は、いま申し上げたルターの宗教改革にあったと言えるかと思います。

しかし、最初は英国でも「ピューリタン」という言葉は、いろいろ揶揄(やゆ)され、「やかまし屋」とか、「偽善者」を表す象徴的な言葉として言われたこともあるぐらいでした。

伝統的な村祭りとか、ダンスとか、酒とか、こういうものを守ろうとする伝統主義者とそれに対して厳しい倫理を要求するピューリタニズムという対立が当時ありました。又、王政を守ろうとする立場と市民革命とかピューリタニズムを目指す立場に、そのころ分かれたということがありました。

そして、そういう中でピューリタニズムというものが、勢いを得ながら、大商人の暴利を悪事として厳しく取り締まるようになってきました。まさに中産階級の勃興の時代でもありました。そして、中産階級の勃興する小ブルジョアジーが、最後は、ものすごく厳しく自分たちを取り締まるということになりました。

なぜか。普通であれば、お金をどんどんもうけ、利益を拡大しようとするのが、いままでの商人社会の人間ではないか。新しい仕事をして、金をもうけようとするのは当然の行為であるにもかかわらず、自らがそれを抑えようとする。そういう反資本主義的な行為に賛同していくという小ブルジョアジーの姿は一見奇妙に見えます。一生懸命お金をもうけようとしながら、一方において、ピューリタニズムで、その暴利に対して、あるいは資本というものに対して、猛烈に心の中で抵抗するということです。

そして、資本家と共に、働く人までもが禁欲を受け入れていったわけです。そういう動きがありました。だが、勤労と節約ということがこの禁欲というものの背景ではないのだということを言っています。つまり、楽をしたいとか、働かなくてもいい賃金を

得たいというのは労働者が当然考えることだ。しかしながら、そこで、そう思わない層が増えてきた、ということです。小ブルジョアジーにもかかわらず、金をもうけるのが天職だと思わないで、むしろ、それを抑えようという禁欲の方を逆に行動に表していったということがありましたが—いかにもかっこよく見えるわけですが—、そういうことで、この近代の資本主義が発展していったわけではないのだということをマックス・ウェーバーは言いました。

では、それは何か。仕事というのは天職だ。神が与えた天職だ。仕事を勤勉にやるということは、神に対して尽くすということだ。そして、もうけというのは、神に対して尽くしているということが、結果として、もうけるということにつながっていく、仕事をすればするほど神に対して仕えていることになる。我々は神から与えられた仕事をしているのだという考え方になっていったということです。

これは、やはり宗教教育の結果として生まれた徳目である、身に付いた社会的信義となっていった、こう言っているわけです。

もちろん商売も、金もうけそのものが目的ではない。神の栄光と社会の人々のため—彼は隣人愛と言っていますが—社会の人々のために、神からの天職として仕事に励む。無駄な支出をしない、金が残る。これは、人々と天職のおかげなのだ。自分たちが勤勉で一生懸命働く、節約して金が残る。これは神からの与えられた仕事を一生懸命やる、その証しなのだと考えるわけで、金をもうけるために働いているのではないという思いが非常に強くあったということです。

これは、救いの確信であり、そして、手許で消費しないで、社会の人々のために使おうとした。つまり、公のための寄付の精神を持った。手許に残ったお金を寄付する、そしてこれを財団というかたちで使っていく。

こうした天職と寄付という考え、あるいは貪欲の抑制こそがマックス・ウエーバーの言う資本主義の精神の中核にあるものだと考えるのが妥当であり、これは後ほど申し上げる近江商人の哲学とお布施の考えにも通じるものです。

忠兵衛がよく言っております。もうけるということは、もちろん大きな喜びであります、それを抑制しながら、もうけたものをお布施として社会的に寄付する、まさにマックス・ウエーバーの言う天職の思想と寄付行為、そして、それが財団に結び付いていくということと極めて似ています。

しかし、なぜそのように自分の意志の力で考えるようになったのか。これについては、「エートス」という言葉で説明できるように思います。これは倫理以上に、人々の「血と肉」になっている社会的な精神でして、こういうふうにやろうと考えてやるというよりも、こういうふうに動いていくというものです。私に言わせると、宗教教育を受けたからそうなのではなくて、小さいときからお父さんやお母さんの姿を見て、自然に血と肉になっていくということです。

こういう言行一致の姿勢というものは、まさに忠兵衛の姿勢ですが、近江の人々の姿勢にも非常に似ているということです。これはデータの的にもそういえるわけです。

2006年の数字によりますと、滋賀県は、人口千人当たりの仏教系のお寺の数は日本一です。非常に多い。仏教系だけでなく、全宗教の団体数も、人口千人当たりで見ますと、福井県に次いで第2位です。仏教系だけで見れば滋賀県は断トツの1位です。

つまり、それは、当時から浄土真宗が極めて多かったからでしょうが、これは忠兵衛が、社会全体やあるいは周辺の家族等が南無阿弥陀仏というものを唱えるのを聞き、それがそうとう小さいこ

ろから彼の血と肉になっていったからではないでしょうか。

ここから、私は、忠兵衛の行ったお布施は、少なくともマックス・ウエーバーの言う精神的な禁欲と抑制、残ったお金を寄付する、あるいは財団を作ることに極めて似かよっていると考えerわけす。

ピューリタニズムの精神・倫理というのは、まさに近江商人の商売道の精神と極めて似ています。そして、これはピューリタニズムの教育を受けたからということではなくて、まさに、お父さん、お母さん、あるいは周辺の方、隣人の姿を見て育った子どもたちの血と肉になり、それが精神的な抑制となって輝いたからではないかと思ひます。

そして、エートスや精神が時代とともに薄れ、やがて失われていき、信仰も薄れて、金もうけが一人歩きを始めました。現在の資本主義社会に非常に近くなってきました。いつの間にか、この信仰、あるいは倫理というものが薄れ、金もうけというものが表に大きく出始めたということです。

いまや、私の言葉で言うと、いまの資本主義社会で、このマックス・ウエーバーの精神、あるいは近江商人の商売道の精神が亡霊のように、この世界をさまよっているのではないかとすら思ひます。

さて、初代忠兵衛が、近江商人に共有の精神を表現した「商売は菩薩の業、商売道の尊さは、売り買い何れをも益し、世の不足をうずめ、御仏の心にかなうもの」という言葉は、まさにいまで私が申し上げたようなことです。ここには謙虚と禁欲の精神があります。

日本ではしばしば「道」という言葉を使ひます。これは、「術」を極めるのに心を伴うことが必要だからです。武術であれば武道です。剣術であれば剣道になるでしょう。柔術は柔道になります。お茶は茶道になり、花は華道になり、そして、商売は商売道になる。

これはただ単なる術ではなく、心というものが伴う。商売道というのは単なる商売ではない、心をなくして商売はないということでもあります。従って、近江商人の精神では、まさに商売そのものが商売道の精神である、と私は言えると思います。

マックス・ウェーバーの著書の30年前に、すでに忠兵衛は「店法」を確定し、利益三分主義の成文化ということで、純利益を本家納め、本店積立、店員配当の三つに分けるとしています。本家を株主と見れば、本家納めで株主を大事にする。本店の積立というのは会社であれば資本で、会社の利益に留保し、それを投資に回す。そして社員全員にも配当する。つまり、これは当然のことながら社員のボーナスということになるでしょう。そして、本家の利益については寄付で社会に還元する。

この経営理念の底流には、「義の心」、つまり仏教というものが、かなり根強く流れていたのではないかと思います。これはまさに、上から与えられたピューリタニズムの倫理とか宗教教育以上の力を持っていたのではないのでしょうか。つまり、中世のピューリタニズムというような宗教教育ではなく、それ以上に根深い儒教と仏教というものの影響が出ていたのではないかと思います。

小さいころから近江の人というのは、孔子とか、あるいは孟子とか、荀子とかの教え、あるいは陽明学や儒教の影響を受けていたと同時に、やはり宗教、この地域であれば、特に親鸞を始めとする浄土真宗、そういう教えが大変に根強く伝わっていたことの影響も受けているのではないかと思います。

忠兵衛の「店法」、あるいは、会社の利益三分主義も考えてみれば、会計や簿記をベースにしておりますが、ヨーロッパにおいても、初めて会計というものが正式に株式会社の中で義務付けられたのはその数十年前です。第三者による会計監査というものが始まったのは、何とイギリスにおいても

1879年なのです。忠兵衛が「店法」を決めたのが1872年です。そして、会計の簿記というものを1893年に忠兵衛が始めているわけです。イギリスなどと比べても時期的には、それほどの違いはありません。イギリスではビクトリア朝時代に初めて、現在の株式会社のような第三者による会計監査が義務付けられたということです。従って、近代日本の資本主義というものの、ほぼ時を同じくして始まっているということが言えるのではないかと思います。

話題を戻しますが、さっき申し上げた儒教というのは、すでに律令制前の5、6世紀頃に日本に入ってきます。そして、『論語』の精神というものが、家庭教育と言いますか、父母の教えとして、念仏ともに、宗教のように発展してきたのかなと思います。儒教の教えは、仁、義、礼、智、信、あるいは五倫です。この仁、義、礼、智、信と五倫というのは、君臣とか、夫婦、兄弟、あるいは父と子、あるいは古い友達との関係の教えです。

あるいは、九つの徳目というものがありますが、こういった孔子、孟子、荀子などの教えを、いちいち九つ挙げるとか、挙げないとかいうのではなくて、もう知らず知らずのうちに血となり、肉となって、近江商人の心に入ってきていたということが、私は近江商人の精神というものにつながってきているのだらうと思います。

先ほど寺院の数の話を申し上げましたが、私は、現在も、近江の方々の中には、まだ仏教とか、あるいは、倫理観というものが非常に強い方がおられるのではないかと思います。

さて、伊藤忠商事がずっと続けていることのひとつはどこの国へ行っても、「清く、正しく、美しく」を経営理念にし、その国の人のため、社会のため、その国のために働く、ということです。私が海外に行くたびに、伊藤忠の従業員に聞いてみますが、

「そんなことを商社がやってもうかるのか」という質問は中国人の従業員から一番多く聞かれます。私はそのたびに次のように言っています。「たとえ500億の利益が出るからと言っても、不正を働くのであるならやめてほしい。あるいは、うそをつかなければできないのであれば、やめなさい、絶対やってはいけない」。

500億の損失がでたとしても、商売で取り返すことは可能だけれども、いったん信用を失ったらそれを取り返すのには、何年もかかる。商売で損をしても取り返すことは可能で、それほど苦労にはならないが、社会の信用を失えば、その損失は500億では済まない。1千億でも済まないし、いや4千億でも済まないほど取り返すことは難しいものです。

従って、先般の自動車メーカーさんはリコール問題では、社会的な信用を失っていると私は思っています。ここで、もうそをつけば、更に社会の信用を失うでしょうから絶対にうそはつかないと思います。うそをついた時の怖さをご存じのはずですから、絶対につくことはないと思います。しかしながら、もうそをつけば、それは極端な場合には会社もつぶしかねないということがあります。私が海外の支社で言っているのは、そういうことを考えているからです。

「清く、正しく、美しく」という、ばかみたいに見える言葉ですが、この簡単な言葉ほど実行が難しい言葉はないのです。難しい言葉は、みんなの頭の中に入りません。そんなことをいちいち覚えていられません。人間は、簡単な言葉しか覚え切れないのです。

簡単だが、実行は難しい言葉ですが、これさえやれば社会の信用を失うことはございません。ということで、私は、これはまさに忠兵衛の精神を継承する言葉であると思っています。私も意識的に忠兵衛の精神を継いだわけではありませんが、私も

浄土真宗でありまして、仏教というものの影響を受けていますし、やはり、日ごろのおじいちゃん、おばあちゃんの言動を見ていたことが影響していると思います。私はよく小さいころから、「仏様が見てござる」、「仏様が見ていて、おまえがどんなにうまくうそをついたって、絶対にばれるぞ」ということを嫌というほど言われてきました。そういう意味から言っても、近江の人々はおじいちゃん、おばあちゃん、あるいはお父さん、お母さんから、そういうことを小さいころから聞いているわけですし、それが血となり肉となっており、忠兵衛にもその教えが伝わっていたと私は思います。

忠兵衛の考えが当時の店員にも伝わり、店員に共有されていったわけですが、それがまさにマックス・ウェーバーの言う、労働者や小ブルジョアジーが、あの時代に当然のこのように、自らを批判して、そして近代資本主義の精神を語り続けてきたことに似ているように思います。

まさに彼の言う近代資本主義の精神とは、そういうものです。そして、要するに、近江商人は何かこういうものであるというより、さらに大きな底流に流れている縁として、共通のものがそこにあるということだと思います。

現代も、そういうマックス・ウェーバーに流れた精神や近江商人の精神が、形だけ、姿だけではなく、精神として残っており、今後、資本主義が永続するためには、宗教が何であれ、私は連綿として受け継がれてきた近江商人の精神が必要であると思っています。人間がいかに不可解な動物であろうとも、この精神は必ず人々の胸に刻まれ続けていくのではないかと考えていますし、商売道と共に、近江商人の精神と倫理が引き継がれて行くものだと思います。

(講演終了)